

「線」の西洋から見た「面」の日本

シェルトン, バリー. 2014. 片木篤訳.

『日本の都市から学ぶこと: 西洋から見た日本の都市デザイン』東京: 鹿島出版会.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程
笹野益生

本書は、都市史・都市理論・都市形態学・都市デザインを専門とする著者による都市デザインを主題とした著作である。英語による原著は、1999年にロンドンで刊行され、2012年に第二版が刊行された。本書は、第二版の日本語訳にあたるものである。

著者のバリー・シェルトン(1944～)は、イギリス・ノッティンガム出身で、現在は、シドニー大学建築・デザイン・都市計画学部名誉教授である。1986年にオーストラリアにあるアデレード大学大学院建築学科都市計画修士課程を修了し、タスマニア大学、シドニー大学、メルボルン大学など、主にオーストラリアの大学でアーバン・デザインについて教鞭をとり、2007年には名古屋大学で客員教授を務めた。本書は、日本の都市のデザイン(形態・構造)にはいかなる特質があるのかという問題について、西洋の都市デザインとの比較の視点を交えつつ解き明かそうとする試みである。

本書は全7章で構成されている。第1章では、日本の都市の形態や構造に対する西洋の関心の移り変わりについて論じている。建築の短命さによる仮設性や特徴のなさという日本の都市に対する西洋人の懐疑論には根強いものがあるが、近年においては、日本の都市に対する理解が進み、肯定的に評価されるようにさえなった。とりわけ、東京の都市構成を、高くて硬いコンクリート造商業施設の「殻」が、柔軟性に富んだ小売業・サービス業の「白身」とさらに柔らかな住宅の「黄身」を包み込む卵のような層になぞらえたイギリス人作家ピーター・ポパムや、西洋と日本の都市を「時計」と「雲」として詩的に拡大し、現代の科学・哲学思潮に最接近させた建築家・槇文彦から触発される部分が大きかったようである。

第2章では、文字や筆記法から、建築、都市、都市図にいたるまで、さまざまな文化的テキストにおいて、空間への配置という共通の行為に関係する類似の特質が認められること、その特質が、日本と西洋との間においては、「面」と「線」という根本的な差異となって観察されることについて、さまざまな具体例に基づき論じている。日本の「面」は、パッチワーク、図形性、独立性・自立性、多方向性、融通性、包摂的、フレキシブルといった特性につながり、対する西洋の「線」は、ネットワーク、抽象性、相互依存性、一方向性、融通性がない、排他的、固定的といった特性につながるのである。

第3章では、日本の都市の特質を、街路とそれに関連した建物やサイン、活動などがつくり出す都市景観から明らかにしていく。日本の都市景観には、江戸時代から続く「武家地—武家屋敷」、「町人地—町家」、「町人地—長屋」の三つの類型がある。「武家屋敷」は、街路を挟んだ高い塀の向こう側の庭園の中に、独立して建てられており、その特性は、現代の郊外住宅地にも継承されている。その最良の部屋は画地の中心にあり、街路側正面には現れないが、これに対し、西洋の住宅は、壮大なものから卑近なものへ、常に街路側正面から背後へと、線

状かつヒエラルキカルに進む。

とくに「町家」と街路空間との関係について見た場合、日本の都市では、幟(のぼり)や提灯、のれんといったサインによる情報や人々と商品からなる活動が建物という文脈や形態を圧倒する。これには、漢字の性質や力によるところも大きく、街路は情報・活動の経路や容器として機能する。これに対し、西洋の都市では、正面が堅固で、装飾が施された街路建築自体に情報を発する力があるため、そもそもサインは不要なのである。

第4章では、宗教・文化的側面と都市の空間や形態のあり方との関わりについて論じている。自然や木材に対する神道の愛着とかりそめのものに対する仏教の信仰とが、日本列島の自然の脅威と結びつくことで、仮設性という日本の都市の伝統が育まれてきた。逆に西洋人は、建築や都市を通して、気候や景観、時間を力づくで克服しようと努力してきた。また、西洋では、新たな慣習や信条が古いものにとって代わる傾向が強いのにに対し、日本では、宗教や文字、衣服などにおける古いものと新しいものとの共存に示されるように、その傾向は弱い。

第5章では、日本の都市デザインにおいて伝統的に体现されてきた感性や態度には、現代の西洋で生み出された新しい思考に共通する性質、すなわち断片化、非集中化、重合、コラージュなどが認められると指摘する。

第6章では、名古屋市御器所の大街区を事例として取り上げ、これまで見てきた日本の都市の特質が、具体的にどのように観察されるかについて考察を加えている。

第7章では、名古屋市御器所とイギリスのニュータウン、ミルトン・キーンズ市ヒーランズとの比較により、前章で肯定的に評価した前者に対し、後者の大街区構造に痛烈な批判を浴びせている。

本書の学術的意義としてまず挙げられることは、一般の西洋人にとっては体験したことのない、そして多くの日本人にとっても、日常的な環境であるにもかかわらず、茫漠としていて捉えどころのない日本の都市の形態・構造の特質を、「面」をはじめとする平易な概念を使って解き明かしたという点にある。随所で比較の対象として参照される西洋の都市の特質を「線」として捉えることで、読者には、両者の差異が鮮やかなコントラストとして浮かび上がってくるのではないだろうか。

そして、とくに最も注目すべき特色であり、魅力でもあるのは、上記の差異が、本書の主題である都市だけでなく、文字や筆記、伝統的建築、都市図といった文化的文脈のすべてに一貫して強い類似性をもつことに着目した点にあるだろう。これによって、日本と西洋の都市デザインの差異が、より体系的に、説得力をもって説明されるように思われる。これらの文化的文脈を空間配置という共通点によって結びつけた本書には、都市デザインという枠組みを超え、より普遍的な空間論やデザイン論、比較文化論にも資するところがあるのではないだろうか。

他方、本書の意義であり特色でもある日本の「面」と西洋の「線」という対比は、現実の都市において、どの程度有効なのであろうか。この対比に当てはまらない都市デザインも存在するのではないだろうか。これに関して思い浮かぶのは、日本の伝統的な宿場町である。街道沿いに町家が連続して建ち並ぶ都市形態を、「面」で説明できるだろうか。どちらかと言えば、街路を主要形態要素とする「線」の要素が強いと言えるのではないだろうか。

また、日本の都市との比較に引用される西洋の都市の事例の選定は適切であろうか。例えば、第3章の街路と住宅との関係について比較したくんだり、日本の武家地やその特性が継承された郊外住宅地の住宅(庭園の中に住宅が独立して建ち、最良の部屋は画地の中心に

ある)に対し、同時代におけるサン・フランシスコの街路に面し、正面が装飾された住宅(壮大な街路側正面から卑近な背後へと進む)を引き合いに出すことに妥当性はあるだろうか。同時代のサン・フランシスコにも、日本の郊外住宅に類似の住宅が存在するとしたら、事例の選び方によって違った結論が導かれたり、結論ありきの事例選定になったりする懸念があるのではないだろうか。

とはいえ、以上のような課題を差し引いても、著者が、私たちにとって、いわば空気に近い存在である日本の文字や筆記、建築、都市デザインの形態や構造に一貫する本質のようなものを抉り出してみせたことは驚きであり、上述の意義が損なわれることはないだろう。それには、著者が西洋の都市デザインに精通した専門家であると同時に、西洋人ならではの新鮮な目で日本を見ることができたのも大きかったのではないだろうか。雑誌の表紙や都市図に都市の縮図を読み取った著者の慧眼に唸らせられる読者は、評者を含めて少なくないであろう。刊行からある程度の期間が経過し、都市デザイン論という専門領域で確かな評価を得た本書だからこそ、都市デザイン論を超える学際的な成果や面白さを、この機会を利用して紹介することは決して無駄ではないと考える。